

「深川ひきがえるバスターズ」会員通信 特別広報版

増える！広がる！外来生物

外来のヒキガエルを排除し、  
深川の環境を守ろう！



北海道e-水プロジェクト

本事業は、北海道、北海道コカ・コーラボトリング㈱、  
(公財)北海道環境財団の三者による協働事業「北海道  
e-水プロジェクト」の支援を受けて、実施します。

編集・発行：深川ひきがえるバスターズ  
ホームページ：<http://fuka-kaeru.com/>

外来生物の問題は、世界的に深刻となっている自然生態系の破壊・消失の主な原因の一つです。深川にもヒキガエル、アライグマ、セイヨウオオマルハナバチ、オオモンシロチョウ、オオハンゴンソウ、アメリカオニアザミなどなど、昔とは較べものにならないスピードで道外や海外から大量の外来生物が押し寄せて定着し、元々の生態系を壊して、古き良き時代の深川の環境がなくなりつつあります。

まずは身の回りを観察し、どんな外来生物がいて、どんな変化が進行しているかを知りましょう。そして、外来生物のまん延を食い止め、私たちの財産である深川の環境を守るために、今できることは何かを考えてみませんか。



アズマヒキガエル

撮影：松橋利光

本州を生息地とする大型のカエル。1970年代、神居古潭付近に人が持ち込み、深川市全域に蔓延拡大。現在は、石狩川流域全体に広がって、道の指定外来種になっている。



アライグマ

全国的・全道的に増加中の特定外来生物。深川でも急速に増加中。スイートコン、スイカ、サクランボなどの被害が深刻。法律に従った計画的な捕獲が必要。



セイヨウオオマルハナバチ

ハウス栽培トマトの花粉媒介のため輸入したが、ハウスから逃げて野外に定着。深川でもありふれたハチとなり、在来のマルハナバチたちを圧倒。野草の受粉障害なども心配される。



オオハンゴンソウ

1950年代に全国に定着。深川でも空地や道路縁で他の植物を押しつけて大群落を作っている。黄色い大きな花は、美しくはある。特定外来生物。



アメリカオニアザミ

1960年代に物資に混ざって北海道に侵入定着。荒地から家の庭まで広く生育。多数の種類があるアザミ類の中でもトゲが猛烈で、厚いゴム手を履いても掴めないほど鋭い。



オオモンシロチョウ

ヨーロッパから沿海州に侵入したあと1996年に北海道に飛来し定着。世界的に有名な野菜の害虫で、派手なマダラ色の幼虫は、集団でダイコンなどの葉を食べ丸坊主にする。  
左:オオモンシロ、右:普通モンシロ、  
上:オス、下:メス

## 外来生物のなにが問題なの？ 素朴な疑問集

**Q** 外来生物といっても、無害なものから有害なものまであるはず。外来生物が全部ダメなの？

**A** 本来は外来生物全部ダメですが、多くの外来生物は自然に消えていっています。しかし、中には爆発的に増える種があって、特定外来生物や指定外来種になって、駆除(排除)の対象となっています。

**Q** 生活や農業に損害が出てないなら、退治する意味はないのでは？

**A** 生態系への影響は、金額では評価できない大きな損害です。そもそも環境は、私たち人類の一番根本的な存在基盤です。環境が壊れすぎると、経済活動どころか私たちの生活自体が成り立ちません。

**Q** 駆除せずに全部捕獲して出身地に送り返せば解決するのでは？

**A** 全部捕獲できるなら、こんな問題にはなっていません。生きたままの輸送費用も莫大です。また、原産地(本来の分布地域)は広大で多様なので、どこに戻すべきかわからないし、北海道で環境に適応したり寄生虫に感染したりした個体は戻せません。さらに、原産地には原産地なりの環境収容力があるので、そこに大量の個体を送り込めば生存できず、それこそ動物虐待となります。

**Q** 昔から外来生物はあったはず。昔の外来生物は問題にせず、今の外来生物を問題にするのはなぜ？

**A** 昔よりはるかにたくさんの外来生物が押し寄せて急速に事態は悪化しています。昔から定着している外来種より、今何とかできる外来種に駆除努力を集中させ、一つずつ成果を出していくことが大事です。

**Q** ヒキガエルは日本人には馴染みのカエル。本州では稀少生物になっている地域もあるのに、なぜ北海道で問題にするの？

**A** ヒキガエルは大昔から本州、四国、九州にのみ生息し、北海道の自然には無縁のカエル。同じ日本でも、カエルにとっては別の国です。元々の生息地域で絶滅するのも問題ですが、新天地で爆発的に増えるのも問題です。

**Q** 外来生物を放した人を罰することが一番の外来生物対策になるのでは？

**A** 放した人たちを特定するのは難しいし、人を罰しても放した生物は戻ってきません。外来種や生物多様性についての理解を広げ、新たな放逐(遺棄)や逃亡を防ぐことが将来につながる対策だと考えられています。

## 「深川ひきがえるバスターズ」とは

環境保全活動をするボランティア団体。外来生物に対しては、対象種と地域を絞って駆除努力を集中し、着実な成果を出していくことが大事。そこで、ヒキガエルとアライグマを対象に、音江地区の住民が中心となって2018年に設立しました。さらに、2021年に「アライグマ捕獲深川市民の会」ができたため、現在はヒキガエルを対象を絞り、38会員(34個人と4団体)が関係組織と連携しながら、ヒキガエル大発生を終息させるべく奮闘中。

新型コロナウイルス感染症の流行が収束したら、公開の行事や会員募集を再開します。深川では数少ない環境保全活動ですので、関心のある方、是非のぞいてみて下さい。

# アズマヒキガエルとは

～北海道人が持つカエルのイメージとはかけ離れたカエル～

## その1

通称 ヒキガエル、別名ガマガエル。西日本にいるニホンヒキガエルも種としては同じ。

## その2

鳴き声は非常に小さく、しかもほとんど鳴かない。ほとんどジャンプしない。あまり逃げないし、逃げ足も遅い。壁を登れない。

## その3

他のカエルと違って池や川にはいず、庭や草むらや雑木林で生活している。

## その4

完全な夜行性なので、雨の夜に道に出てきたのを見ることはあっても、昼間はまず見つからない。

## その5

他のカエルより強い毒を持っている(ガマの油)。だから、ヒキガエルを捕食する天敵はほとんどいない。



ゲロゲロとは鳴かないよ！

悪者じゃないけど自分では増殖を抑えられないんだ

## その6

人の手のひらほどの大型のカエル。体重はアマガエルの数十倍。アリ、地グモ、ミミズなど、地表で動いているものなら何でも食べて成長する。

## その7

5月の繁殖期になると、自分が生まれた池に突如大集結(いわゆる蛙合戦)し、雌雄が抱接して産卵する。

## その8

メスの成体は、5月に約2,000個の卵を紐状にして産む。孵化したオタマジャクシは1カ月半で微小なカエルに変態し、3、4年かかって成体になる。

そして、新天地の北海道では天敵などによる死亡が少ないため、高い繁殖力を発揮して大発生し、全道にまん延拡大中です

## ----- ヒキガエル大発生を抑えるバスターズの取組み -----

ヒキガエル(成体)は、5月の繁殖期、特定の池に大集合して産卵するので、この時のカエルを全部捕らえ、繁殖を防ぐことができれば、ヒキガエルは地域からいなくなるはずです。

そこで、バスターズでは、皆で手分けして、10数個の池を毎晩巡回し、ヒキガエルの捕獲を行っています。捕獲をより完全で省力的にするため、予め池の回りにカエルをさえぎるフェンスを張っておきます。

それでも池に入ったカエルは、池の中に仕掛けておいた“かご罠”で捕らえ、水底にある卵紐(ひも状の寒天質に入った卵)は、捜して引き上げます。それでも発生してしまったオタマジャクシは、手網でできる限り掬い出します。

どれも人海戦術なので、多くの人の協力が必要です！なお、捕らえたカエルは、二酸化炭素などで窒息(いわゆる安楽死)させたあと、環境の物質循環も考えて、もといたところの土に返しています。

人が管理できなくなった古い溜池については、今後ヒキガエルの繁殖場所とならないよう、重機を使った水抜き工事もバスターズでは行っています。

### バスターズが取り組んでいる ヒキガエル駆除手法

1. 毎晩 池を巡回してカエルを捕獲
2. 池への侵入をフェンスで遮る
3. かご罠でカエルを捕獲
4. 卵やオタマジャクシを池から出す
5. 池の水を抜く

----- バスターズ 今春もヒキガエルの繁殖阻止 ほぼ成功す -----

2021年の結果	夜間の巡回による捕獲		カゴ罠による捕獲	次世代の発生
	延べ捕獲活動人数	捕獲総数		
音江YN池	177人	421匹	74匹	なし
音江SY池		586匹	58匹	なし
音江NG池		432匹	1匹	なし
音江TM池	129人	1,432匹	20匹	なし
音江SB池		487匹	48匹	発生
音江KF池		124匹	9匹	発生
向陽KM池	32人	529匹	44匹	なし
国見KG池	36人	1,195匹	111匹	なし
グリーンパーク	52人	13匹	—	なし
稲田貯水池	—	—	44匹	発生
秩父別3池	—	—	17匹	発生
音江MH池	—	—	194匹	なし
豊泉TH池	—	—	28匹	発生
音江K2池	—	—	8匹	発生
音江S4池	—	—	318匹	なし
音江YI池	8人	12匹	—	なし
音江NP池	17人	2匹	—	なし
向陽NZ池	—	—	106匹	発生
音江MM池	0人	0匹	—	なし

駆除の重点としている池ではフェンスを張り、グリーンパークの池では落水をして、毎晩の捕獲を行い、卵やオタマジャクシの捕獲も行った結果、ほとんどの池で今年の繁殖、つまり次世代の子カエル発生をなくすことができました。

捕獲したヒキガエルの総数は、カゴ罠による捕獲や重点としていない池を合せると、総数6,313匹となり、昨年の7,083匹よりやや減少しました。

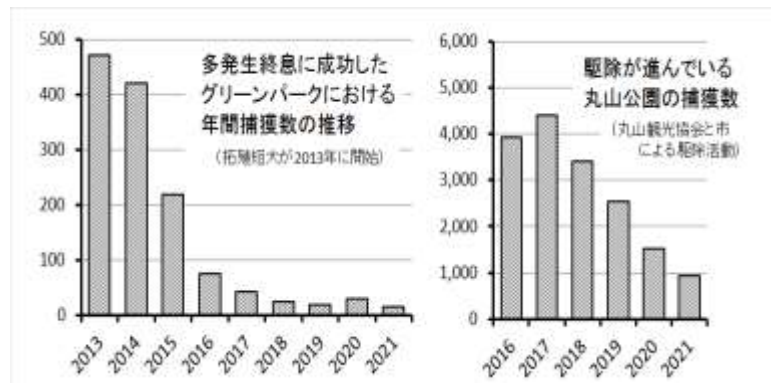
この捕獲によって、大きな成体を家の周りで見るとはほとんどなくなったはずですが、成体になる前の小さな幼体は全く捕獲できていません。ヒキガエルは成体になるまで3、4年かかるので、毎年の繁殖阻止をこれからも続けてゆく必要があります。

ほとんど全部を捕獲できたり、周辺地域から入って来るヒキガエルが少なければ、下図のグリーンパークや丸山公園のように、捕獲数は毎年着実に減少していくはずです。

なお、今年も音江地区では、駆除地周辺にある管理できなくなった溜池に対し、ヒキガエルの繁殖場所とならないよう、池の持ち主と一緒に水抜き工事を



キガエルの繁殖場所とならないよう、池の持ち主と一緒に水抜き工事をしています。



----- アライグマ捕獲深川市民の会もよろしく -----

アライグマは、全国的・全道的に増え続けている侵略的な「特定外来生物」。深川市がとりまとめた捕獲数は、2018年度84頭、2019年度259頭、2020年度468頭と急増中。このまま増え続けると、農地も家庭菜園も全て被害を被ることになります。

アライグマの増加を抑え、減少に転じさせるためには、地域住民が一体となって、今まで以上に強力に計画的な捕獲を行う必要があります。2021年1月に結成されたアライグマ捕獲深川市民の会の活動にもご注目下さい。